

論 文

学校体育における「体育理論」の新たな位置づけとその授業づくり（その1）  
——「文化としてのスポーツ」の学びを位置づける授業の構想に向けて——

吉 田 文 久

日本福祉大学 子ども発達学部

An Attempt to Reform Teaching Plans for "P.E. Theories"  
in the New Physical Education Curriculum of Secondary School (Part 1):  
For Planning for Students to Learn "The Cultural Traits of Sport"

Norihisa YOSHIDA

Faculty of Child Development, Nihon Fukushi University

Keywords：体育理論，スポーツの文化性，授業づくり，学習指導要領，主体者形成

【要旨】

2008年に中学校、2009年に高等学校の学習指導要領が改訂され、「体育理論」は、各学年において、授業時数、具体的な内容が明示された。そこには、体育学習が技術の習得、技能の習熟を重視することでは、それを必修として学ぶ科目として説明責任がつかず、体育不要論にもつながるという問題意識、知識基盤の社会への対応、そして、スポーツに課せられた様々な課題に対応するために、知識としてスポーツをきちんと学ぶ機会を保证する必要があった。スポーツを文化として捉え、スポーツが有する豊かな内容を知識（教養）として学ぶために、体育の授業の中で座学として体育理論の授業が位置づけられることになったのである。しかしながら、体育理論は不毛の領域とされ、不要論が出されるほどであり、実践の蓄積も乏しい。本稿では、体育理論の内容の柱の一つとされる「文化としてのスポーツ」を学ぶ授業試案を提案するための基礎的作業として、上述のような体育理

論の創設から現在までの変遷の理解に加え、乏しいながらも取り組まれている（いた）研究団体・組織や個人の実践を掘り起し、これまでの成果や課題、これからの役割期待について整理した。

はじめに

2008年に中学校の学習指導要領が改訂され、「体育理論」が各学年3時間以上という時間が定められ、必修として位置づいた（文科省 2008：11, 140）。そして、翌年2009年には高等学校でそれは各学年6時間の時間以上が同じく必修となった（文科省 2009：8, 101）。

これまでも「体育理論」は必修とされ、学校、教師の判断で時間数や内容も決めて行われていた。しかしそれは、「雨降り体育」（「雨降り用の『穴埋め番組』」）として、あるいは各単元の、例えばオリエンテーションの一角として実践されるレベルの扱いであり、決して系統立てて行われていたとは言い難い状況であった。それが

今回は時間数を決められ、きちんと指導しなければならなくなったのである。

これまで、体育の授業は実技重視で展開されてきた。つまり、技術の習得が授業の目標とされ、「うまくなること」が目的とされてきたと言ってよい。体育は「実技科目」と言われる所以である。そこに、「わかる」つまり技術認識が位置づけられるようになり、技術の習得、技能の習熟には系統性をもった一定の理論があり、それが学習の対象になるという授業が展開されるようになった。しかしそれは、あくまでも実技指導の範囲を越えず、運動やスポーツの技術の学習を越えた文化の学びとして位置づけられるものではない。また、各運動種目の単元のオリエンテーションでその歴史について学ぶという取り組みが一部行われているが、それは決して体系的な理論の学びとは言いがたい。このような状況が生まれたことを、現場教師の教科指導に対する問題意識の問題として、また体育理論の授業に対する関心や意欲の問題として済ませるのではなく、教員養成の段階で指導されるべきであるという認識も必要である。しかしながら、その学びを保証する授業となるはずの大学での「体育科教育法(体育科指導法)」の授業では、その授業内容として「体育理論」の授業づくりはほとんど位置づけられていないのが現状である<sup>1)</sup>。

このような状況の中で、時代的要請から学校体育にスポーツの文化的意義の理解の学習が求められ、その受け皿として体育理論が重視されたことで、体育理論の授業づくり、とりわけ「文化としてのスポーツ」の学びを柱とする体育理論の授業の研究や実践の蓄積が課題となる。

筆者はこれまで、民衆の娯楽として中世から行われ、英国に現存する民俗フットボールの研究を行ってきた<sup>2)</sup>。それはまさしく地域に根差す民衆固有の文化であり、民俗フットボールの多くが消滅する中で、存続する町や村では住民が担い手となり自分たちの大切な文化を継承し存続させている生の姿がそこにはある。そして、それはサッカー、ラグビーの原型としてスポーツ史、スポーツ人類学では研究対象となり、近代スポーツと対照化され、将来のスポーツの在り方を検討する貴重な材料として位置づけられている。

本研究は、その民俗フットボールを教材として「文化としてのスポーツ」を学ぶ授業を構想し、そのモデルを提示することを目的としているが、本稿では、その構想にあたり、今回の改訂に至るまで体育理論がどのように

扱われてきたかを概括し、「文化としてのスポーツ」を位置づける体育理論が重視された背景、そして「文化としてのスポーツ(の意義)」を学ぶ授業の構想に向けた課題を整理する。そして、次稿では、その具体的な授業モデル試案を提示したい。

## 1. 新しい学習指導要領の中での「体育理論」

ここでは、2008年に中学校、2009年に改訂された高等学校の学習指導要領の中で「体育理論」がどのように位置づけられ、また内容がどのように定められ、今回のスポーツの文化的価値を位置づけるまでに至ったのか、その経過をまとめた。

### (1) 「体育理論」が重視された背景

先進諸国の教育改革を受けて、日本の教育改革、体育改革として2007年の中央教育審議会の審議の概要には、知識基盤の社会(知識を基盤とする能動的で自発的な文化需要の拡大した社会)において確かな学力を身につけさせることが提言された。体育ではそれを受けて、体育的学力を身につけさせるために、学習指導要領には「技能」、「態度」、「知識・思考・判断」という3つの枠組みから学習内容が設定され、それらを身につけるベースとして「わかる」(知識)が重視された。つまり、これからの体育は、運動やスポーツを知的なレベルでとらえ、できることと同時に、運動やスポーツの仕方、あるいは運動やスポーツの原理や原則、そしてそれらの社会的な意味や文化的意義をわからせることが体育の授業で重視されるようになり、そのために体育理論の授業への期待が高まったということである(佐藤・友添 2011: 1-3)。

つまり、「運動の合理的な実践を通して、生涯にわたって運動に親しみ豊かなスポーツライフを送るために必要とされる基礎的な知識を定着させ」、また「運動やスポーツの総合的な理解を深める」ための学習が「体育理論」に期待されたのである(菊 2010: 3)。

このような教育改革に基づく体育理論への期待の他、体育固有の課題からも体育理論の充実が求められた。それは、昨今のスポーツ事情として、勝利至上主義がますます強まるスポーツ競技の在り方、メディアの映し出すスポーツの世界を盲目的に受け止めるスポーツ鑑賞の在り方、スポーツの商業主義に踊らされるスポーツ消費者の拡大などの問題状況に対する自己改革の表れである。スポーツを受動的に受け止めるスポーツ消費者ではなく、

スポーツについて考え、スポーツという文化を継承し、創造・発展させる主体者を育成することに今まさに真剣に取り組むべき時期に来たということである。その意味から、友添が言うように「体育は運動やスポーツにかかわる文化を媒介にして、それを伝え改革し、創造していく過程で自らを形成（身体形成・人格形成）していく教科」（佐藤・友添 2011: 9）として再認識し、知的な理論の学習機会として体育理論が位置づくということである。また、運動やスポーツの知識を享受する機会を学校の体育の授業が十分保証してこなかったという反省に立つものである。

生涯スポーツが標榜されて久しい。今回の改訂を社会や自分にとってのスポーツの意味や意義、スポーツが育んできた文化的内容を科学的・体系的に学ぶことができる機会として、体育理論の授業が役割を果たすことで生涯スポーツの真の実現につながると現場の体育教師は理解する必要があるのである。

## (2) 体育理論の内容の変更

今回（2008年）の改訂により、それまで「体育に関する知識」と称されていたのが、「体育理論」という名称で再び表されるようになり、中学校から高等学校までの6年間必修として位置づけられた。そして、体育理論は、中学校で3章3単元（「運動やスポーツの多様性」、「運動やスポーツが心身の発達に与える効果と安全」、「文化としてのスポーツの意義」）、それぞれ各学年3単位時間以上、高等学校では3章3単元（「スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴」、「運動やスポーツの効果的な学習の仕方」、「豊かなスポーツライフの設計の仕方」）、それぞれ各学年6単位時間以上実施することとされた（佐藤・友添 2011: 17）。

また、小学校から高等学校までを4年をひとまとめにして、4-4-4のまとまりで取り組むこととされている。つまり、小学校1年生から4年生までを「様々な動きを身につける時期」、小学校5年生から中学校2年生までを「多くの運動を体験する時期」、そして中学校3年生から高等学校3年生までを「少なくとも一つのスポーツに親しむ時期」の3つに区分して体育の指導が行われることになった。そこで、体育理論では、中学校3年生と高等学校1年生で学ぶ内容を連携させ、「文化としてのスポーツの意義」の学びを系統的に学ぶように設定されている。そして、高等学校3年生では、青年期以降のス

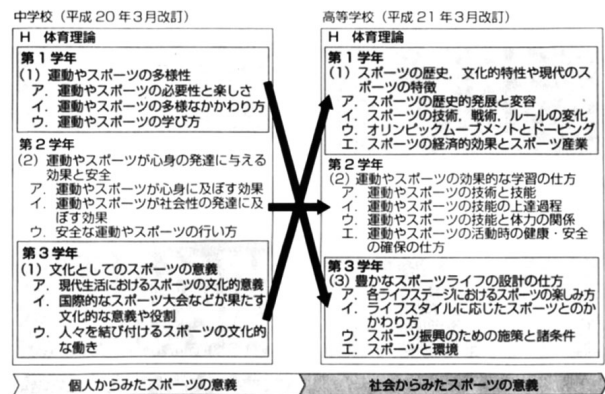


図1 体育理論の中学校、高等学校の系統性（佐藤・友添 2011: 17）

スポーツ実践につながる学びとして「豊かなスポーツライフの設計の仕方」が位置づけられている（ibid: 20-21）。（図1参照）

さらに、前学習指導要領との内容比較においては、中学校では、それまでの2つの柱をより細分化した内容に組み立て直され、学年配当も明確に示されている。これは高等学校においても同様であり、何をいつ指導するのかについて明示され、その内容と体育理論以外の「体づくり運動」や「その他の運動領域」（器械運動、陸上運動、水泳、ダンス、球技、武道）との関連も示されたことは、体育・スポーツに関する知識を学ぶことと運動・スポーツの実技指導を関係づけた総合的な学びが今後展開される必要を示したと受け止められる。そこでは、理論を断片的に、また部分的に学ぶのではなく、系統的、体系的に学ぶ授業実践が求められているのである。

その背景には、スポーツを「する」という視点で受け止めてきた体育授業に対して、スポーツへの興味・関心の拡大に基づく社会的存在としての意味の拡大により、スポーツを「みる」、「支える」といった視点から、スポーツの知識をきちんと学び、理解することが学校体育の使命であるという認識がある。つまり、国民的教養としてスポーツを捉え、それにふさわしい学びの場を体育理論の授業の役割期待として示されたのだと受け止める必要があるのである。

そのような流れを汲んで、今回の学習指導要領の改訂において中学校の「体育理論」に関して、「指導すべき知識の内容の精選と基礎的な知識の確実な定着、高等学校への接続を考慮して領域名が現行の『体育に関する知識』から従前の高等学校と同じ名称の『体育理論』に改められた」（菊 2010: 3）。そして、これまで中学校段



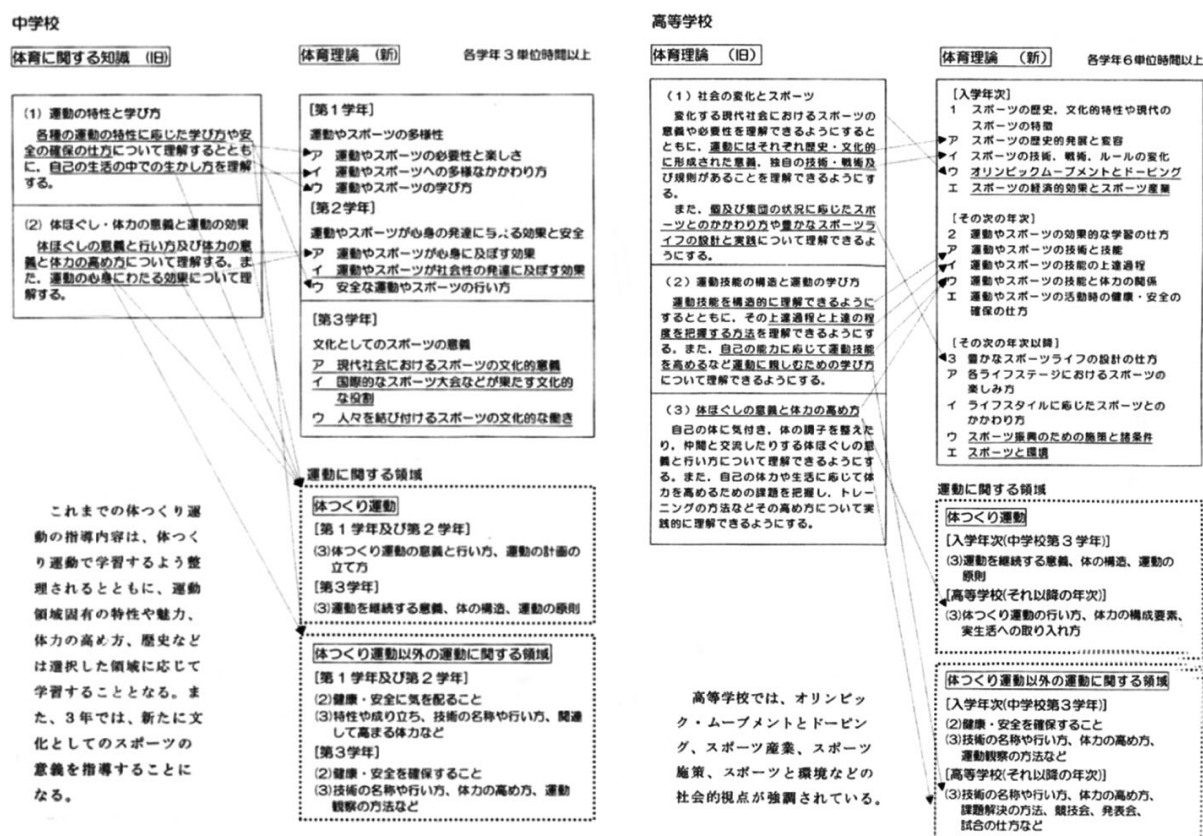


図2 中学校、高等学校の学習指導要領の新旧対象から見たポイント (佐藤・友添 2011: 18-19)

階ではスポーツを文化として捉える知的・理論的学習が行われていなかったところに、第3学年に「文化としてのスポーツの意義」の内容が位置づけられたのである。

### (3)「文化としてのスポーツ」の主張とその背景

今回の学習指導要領の改訂に影響を与え、また直接作業にあたった人物の主張をもとに、「文化としてのスポーツ」を位置づける根拠・理由について整理したい。

友添は、ドーピングの問題を指摘した上で、現代のトップスポーツはいま、大きな岐路にさしかかっているという認識を示し、スポーツを私たちの有用な文化にしたいためには、それを単に「プレイ」するだけでは実現せず、勝利至上主義や弱肉強食に塗られたスポーツを相対化したり、スポーツで地域を再生したり、スポーツを生き甲斐づくりの重要なパートナーにしたり、スポーツをする権利をみんなで実現する運動やスポーツの広範で精選された知を教室で学ばせる必要があるとする。それにより、子どもたちがスポーツについて強く深く考えるようになり、彼らをスポーツという文化の新たな創造者に育てることができる。そこでは、スポーツを人類の貴重

な文化資源と捉え、つまり「文化としてのスポーツ」が学びの対象となり、そのスポーツを伝え、変革し、創造していく過程で学習者が自らを形成していくことがこれからの体育に求められているというのである(友添 2009: 14)。

また菊は、「することだけがスポーツではない」(菊, 2009)と題する論考の中で、豊かなスポーツへの認識を深めていくためには、スポーツをするだけでなく、見たり、支えたり、読んだり、調べたり、といった様々なかわり方をするという意味を考え、具体的にこれらを享受することが必要であり、「する」スポーツは、スポーツ観やスポーツ規範にコントロールされることによって、つまりスポーツの社会的、文化的な価値に触れることで初めて人間的意味と価値をもつという。そして、ルールの意味とその工夫やマナーといった内容は知的学習でしか保障されないとまで述べている(菊 2009: 19)。

さらに、今改訂の作業にあたった当時文科省の教科調査官であった佐藤は、直接かかわった「中央教育審議会教育課程部会健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会体育分野ワーキンググループ」での議論をもとに、

体育において「うまくなる」ことだけでなく、「知識」をきちんと学ぶことが重視された背景を次のように説明している。これまでの「ゆとり教育」の反省を踏まえ、基礎的・基本的な知識・技能の習得とそれらを活用する思考力・判断力・表現力を伸ばす必要性が求められ、また先進諸国は「体育はその国の教育にどのように寄与できるか」という問いに対して成果や証拠が求められるようになった。そのような国内外の潮流を受け、公教育の質の保証（ミニマム）と説明責任（アカウンタビリティ）が求められる時代にあって、「体育で何を教えるか」が重点課題となり、その基礎となる体育の「知」が重視されることとなったとする。そして、それを踏まえたワーキングの議論で、「知」（知識）の内容として設定されたのが、体の動かし方、運動やスポーツの行い方に関する知識、運動やスポーツにおける体力、健康・安全に関する知識、運動やスポーツの実践につながる態度に関する知識、生涯スポーツの設計に関する知識の4つであった（佐藤 2009：24-26）。明示はされていないが、そこでは、それらを学ぶための受け皿として、これまでその役割期待がされていながら、ほとんど機能していなかった「体育理論」を座学として位置づけ、再興しようということが検討されたに違いない。また、「文化としてのスポーツ」についての議論もその中でどのように行われたかは示されていないが、の「運動やスポーツの実践につながる態度に関する知識」、の「生涯スポーツの設計に関する知識」のところに、スポーツの文化的意義や価値を位置づけようとしたと解釈することも間違いではないであろう。

「文化としてのスポーツ」の重視については、今回の学習指導要領の改訂が進められる一方で、「スポーツ振興法」（1961年制定）が50年ぶりに全面改正され、「スポーツ基本法」（2011年公布）を国の新たなスポーツに関する施策として検討されていたことは見逃せない。スポーツを世界共通の人類の文化として捉え、その中ではスポーツの豊かな文化意義について指摘されているからである（岡出 2012：16-17）。

## 2. 「体育理論」の創設とその後の学習指導要領における位置づけ

体育理論は、1947年の学校体育指導要綱で誕生した（図3）。そこには、体育の理論として多様な項目は示されたものの、実質的な内容や取り扱いについての記述は

《中学校の内容例》	
<運 動>	
1. 体 操	
(1) 徒 手	
ア	上下肢（屈伸・挙振・回旋・跳躍）
イ	くび（屈・転・回旋）
ウ	胸（伸）
エ	背腹（屈・倒）
オ	体側（屈・倒）
カ	胴体（転・回旋）
(2) 器 械（男）	
ア	跳躍・転回（跳び箱・マット）
イ	懸垂（鉄棒）
2. スポーツ	
(1) 陸上競技（走・跳・すもう（男））	
(2) 球技（野球型・ろう球型・しゅう球型・庭球型）	
(3) 水泳（泳ぎ・飛び込み・水泳心得）	
3. ダンス（女）（表現）	
4. 体育理論	
<衛 生>	
1. 衣食住の衛生	5. 病気の予防
2. 皮膚の摩擦	6. 社会生活の衛生
3. 姿 勢	7. 看護法および救急処置
4. 身体の測定	8. 精神衛生

図3 学校体育指導要綱に示された中学校の体育の内容（前川他 1977：78）より筆者作成

なく<sup>3)</sup>、積極的な実践にまでは至らなかった（井谷，1997：332）。しかし、1951年の中学校学習指導要領では項目とともに具体的な内容が示され、ねらいも「体育の真の価値を正しく理解させ、それを生活に生かし、体育思想を深め、教育を高める」とされた。その後消えてしまうことになるが、体育史やスポーツマンシップといった体育の意味や価値を理解する教養的な内容がそこには含まれていることが特徴である。そして、小学校にも1953年の小学校の学習指導要領において「体育や運動について正しい知識を持つこと」として、年間の授業時間数10%を当てることが明示され、体育理論の領域が位置づけられる。かつて小学校でも体育理論の学習が行われていた根拠がここにある。しかし、それは次の改訂（1968年）では早々と姿を消すことになる。

1956年の高校学習指導要領の改訂以降、技術指導に重点を置いた健康や生活と結びついた体育が求められるようになり、体育の歴史的・文化的・社会的な内容は削られ、技術の習得や運動の方法に関する内容へと変わっていった<sup>4)</sup>。そして、高等学校においては1956年に体育理論学習の配当時間を年間授業時間数の10%

と明記され、また中学校でも体育理論（1958年から2007年まで「体育に関する知識」と称される）は、1958年に5 - 10%を当てることが初めて示され、併せてそれぞれの学習指導要領の改訂時に検定教科書を用いて指導されるようになった<sup>5)</sup>。しかし、そのような位置づけがされたものの、その内実は「体育が運動の中心の学習が中心であり、学習指導要領では、運動の学習と関係の深い知的内容が、運動領域と並んで内容の一領域」（松田・宇土 1978 p.184）となっていた。それは、「体育に関する知識」や「体育理論」には、運動に対する永続的な動機づけとしての役割を果たすことが期待され、運動の需要の高まりに伴い、運動の楽しみ方、正しい行い方など運動に関する基礎的な知識を学ぶ必要性に基づいていた。そして、1969年の中学校学習指導要領改訂から体力主義体育が打ち出され、認識的内容は軽視され実技的内容が拡大していく。その当時の状況について、岡出は「体育理論の学習では、歴史、体育の目的に関する認識の位置づけが後退し、生理学、心理学、力学の知識、あるいは体力に関する知識が中心に位置づけられるようになっていった」（岡出 1990 : 8）と説明している。つまり、「体育の授業は考える（運動やスポーツに関する知識の獲得や理解）より、とにかく身体を動かす（運動する）授業」であり、他教科とは異なって知的学びの場ではないという教科観が支配的となり、実技主義的体育観が醸成されていったと考えられる。そして、技術学習・体力づくりの補完的位置づけをされた体育理論は、現在までも引き継がれている。

その後、時代の要請を受け、生涯体育・スポーツ論に基づく体育が実践されるようになり、体育理論も運動やスポーツの楽しみ方や生涯にわたる体育・スポーツ実践の意味を学ぶ内容が加えられるようになる。制度的には戦後一貫して学習指導要領に体育理論は各学年ですべての生徒に必修（高等学校では全学年、中学校では1・2年生のみ）として位置づけられ、授業時間も体育の時間のうち5 - 10%を当てるとされてきた。しかし、実態は体系的・系統的な授業が展開されているとは言い難く、「雨降り体育」として実践され、また各種目領域のオリエンテーションなど断片的な実践に留まっていた。「教科書の発行や内容についての幾度もの検討とは裏腹に、一部の研究団体や熱心な実践者を除いては衰退の一途をたどっていった」（井谷 1997 : 339）のである。

そのような中で、2008年の改訂において学年ごとに

内容が指定され、中学校、高等学校の両方に学年を接続（中学3年と高校1年に）させて「文化としてのスポーツ」の内容が明確に位置づけられ、授業内容・時間数も明確に示されたことは、精神訓話的な「お説教」、知識を断片的に切り売りする「場当たりの」、「思いつきの」指導（学校体育研究同志会 1978: 1）、「気休め」、「自己満足」的な「理論」的指導（学校体育研究同志会 1978 : 4）とは縁を切り、体育実践における体育理論の意味と価値が問い直され、今後新たな展開が進められていくと受け止められる（表1参照）。

### 3. 「体育理論」の授業づくりの取り組み

本章では、「体育理論」が学習指導要領（要綱）に初めて領域として位置づけられてから今改訂まで、どのように具体的実践に取り組み、議論されてきたかまとめた。

#### (1) 「体育理論」創設期及びそれ以降の授業実践状況

1947年の学校体育指導要綱に「体育理論」が領域として設定されて以降、その後の学習指導要領には体育理論は位置づけられたが、実際に現場でどれだけ注目され、実践されたかについて確認するのは困難である。そこで、体育科教育関係の雑誌の中に掲載された論考や実践報告からその状況を探ってみたい。

図4は、体育科教育分野の専門雑誌である「学校体育」誌（1948年1月創刊、2002年3月廃刊）及び「体育科教育」誌（1953年9月創刊～）に体育理論に関する授業理論や実践報告と受け止められる論考、実践報告が掲載された数の推移を年代別（創刊～1991年まで）に示したものである。

これによると、1947年（昭和22年）の学校体育指導要綱で誕生以降、体育雑誌に体育理論に関する論考が数多く見られるようになる。それは、1958年（昭和33年）に学習指導要領の改訂に合わせて体育理論の検定教科書が作成される前後の時期であり、松田が「『体育に関する知識』が教科書を用いて指導されるようになったのは昭和37年以降のことである」（ibid : 184）と述べていることから、体育理論の授業をどのように構想し、計画、実践するかという課題に応えようとするものであったと思われる。

それは、体育理論の萌芽期に両雑誌の中に掲載された執筆（昭和24年～38年まで）のテーマからいくつか挙げてみてもわかるように（表2参照）、解説、試案、指



表1 学指導要領における体育理論の内容の推移<sup>6)</sup>

中学校学習指導要領		高等学校学習指導要領	
1947 年	・体育史 ・体育の目的 ・各種運動の解説 ・練習法 ・スポーツマンシップ ・家庭体育 ・社会体育 ・国際競技 ・余暇の利用 ・運動衛生	1947 年	・体育史 ・体育の目的 ・各種運動の解説 ・練習法 ・スポーツマンシップ ・家庭体育 ・社会体育 ・国際競技 ・余暇の利用 ・運動衛生
1951 年	・体育史 ・体育の目的 ・スポーツマンシップ ・レクリエーション ・家庭体育 ・運動衛生 ・国際競技	1951 年	・体育史 ・体育の目的 ・スポーツマンシップ ・レクリエーション ・家庭体育 ・運動衛生 ・国際競技
		1956 年	・発育と体育 ・運動の学習方法 ・生活と体育
1958 年	・運動種目の特性 ・練習の重要性と練習に関する諸条件 ・練習方法 ・運動生活の設計	1960 年	・発育と運動 ・運動の練習 ・社会生活と体育
1969 年	・中学校生徒の特性と運動 ・運動の特性と練習 ・運動の効果 ・体力の測定方法と結果の活用 ・現代の生活と運動 ・運動によるレクリエーションの現状	1970 年	・運動の特性と類型 (運動の生理, 運動の力学, 運動の心理, 運動の類型) ・生活と運動 (体力と運動, 現代社会と運動, 現代社会におけるスポーツ, わが国の体育)
1977 年	・運動と心身の働き ・運の練習と体力の測定	1978 年	・運動の生理学的/心理学的/力学的特性 ・運動処方と練習法 ・現代社会と運動
1989 年	・運動と心身の働き ・体力の測定と運動の練習	1989 年	・体力トレーニングの方法と内容 ・運動技能の構造と練習法 ・現代社会とスポーツ
1998 年	・運動の特性と学び方 ・体ほぐし, 体力の意義と運動の効果	1999 年	・社会の変化とスポーツ ・運動技能の構造と運動の学び方 ・体ほぐしの意義と体力の高め方
2008 年	・運動やスポーツの多様性 (1 年) ・運度やスポーツが心身の発達に与える効果と安全 (2 年) ・文化としてのスポーツの意義 (3 年)	2009 年	・スポーツの歴史, 文化的特性や現代のスポーツの特性 (1 年) ・運動やスポーツの効果的な学習の仕方 (2 年) ・豊かなスポーツライフの設計の仕方 (3 年)

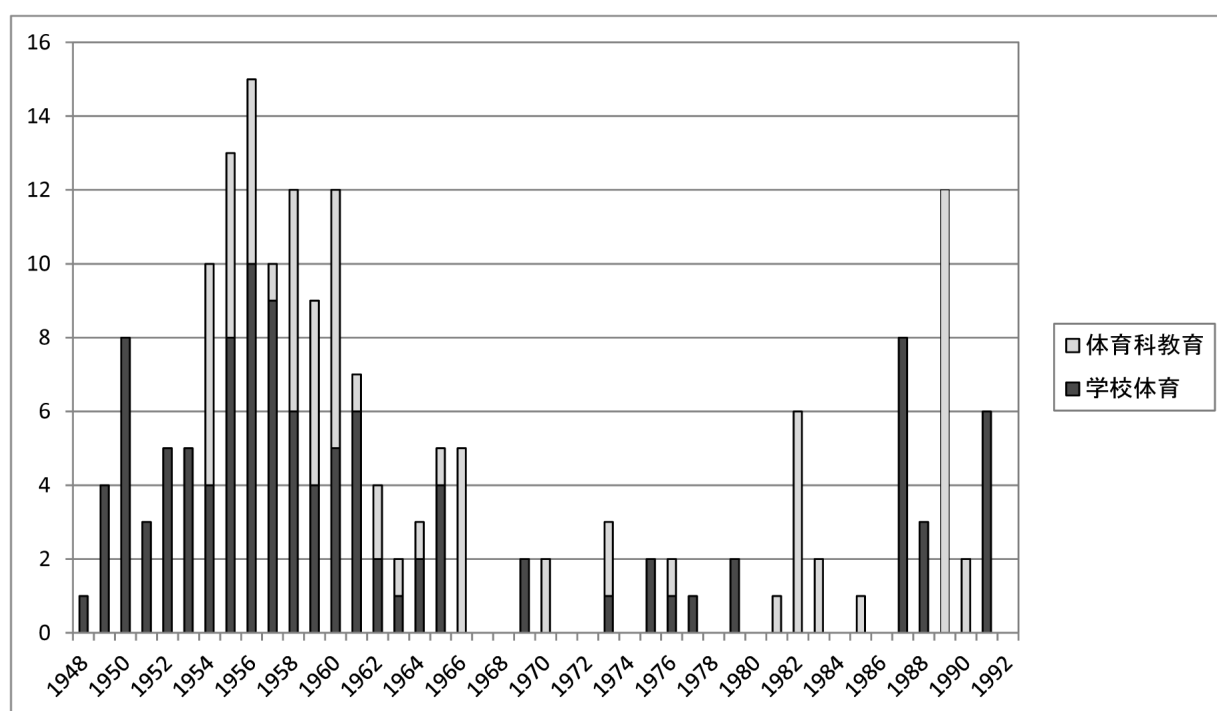
図4 < 体育雑誌における体育理論に関する執筆の年度別掲載数の推移 (創刊から約40年間) ><sup>7)</sup>

表2 体育理論の萌芽期に体育雑誌に掲載された執筆内容

- 「私の試みた体育理論の指導」(大平<藤澤一中>, 学校体育, 1949.2)  
 「私の指導案-わが校の体育史-」(川口<東京教育大東京高師>, 学校体育, 1950.5)  
 「体育理論の学習指導」(川口<東京教育大東京高師>, 学校体育, 1951.12)  
 「体育理論-バスケットボール-」(高橋<東京教育大附属中>, 学校体育, 1953.4)  
 「(準)体育教科書を使つてのバスケットボールの学習指導」(東京教育大学附属中, 学校体育, 1953.10)  
 「中学校における体育理論の指導-運動の練習法-」(松田<東京教育大>, 学校体育, 1954.4)  
 「高等学校の体育理論はどう指導したらよいか」(浅井<奈良女子大附属小>, 体育科教育, 1954.6)  
 「『体育の歩み』の指導-中学校の体育史指導」(岸野<東京教育大>, 学校体育, 1954.12)  
 「体育理論の指導の実際」(古屋<東京教育大学附属小>, 体育科教育)  
 「昭和30年度の理論の指導計画」(東京教育大学附属中, 学校体育, 1955.3)  
 「体育の知的理解を深める指導計画-高等学校」(佐藤<不明>, 体育科教育, 1955.3)  
 「新しい高校の体育理論の内容について」(野沢<不明>, 学校体育, 1955.8)  
 「体育の理論学習はどのように指導したらよいか(私の試案)」(中村<東京教育大付属高>, 体育科教育, 1956.5)  
 「中学体育理論の指導-オリンピック競技」(川口<東京教育大>, 学校体育, 1956.6)  
 「オリンピック大会競技を体育学習においてどのように取り扱うか-小学校-」(石井<神奈川県教育委員会>, 体育科教育, 1956.11)  
 「我が校の体育理論の年間計画」(加藤<埼玉大学付属中>, 学校体育, 1957.3)  
 「体育科の指導内容の理論の内容について(小学校)」(榊原<大田区立道塚小>, 学校体育, 1957.8)  
 「わが国に於ける近代スポーツの発展-中学校体育理論の指導-」(岸野<東京教育大>, 体育科教育, 1957.8)  
 「体育教科書の扱い方」(浅井<不明>, 体育科教育, 1958.2)  
 「高校体育教科書の扱い方-」(高橋<不明>, 体育科教育, 1958.5-7)  
 「小学校体育『知識』の指導-運動の特質について」(土佐<滋賀大学附属小>, 体育科教育, 1959.12)  
 「ローマオリンピックを小学校でどう指導したらよいか」(高田, <東京教育大学附属小>, 体育科教育, 1960.8)  
 「ローマオリンピックを中学校でどう指導したらよいか」(田野村<東京都北区赤羽中>, 体育科教育, 1960.8)  
 「小学生に対するスポーツ鑑賞の指導」(岩丸<お茶の水附属小>, 学校体育 1960.8)  
 「運動学習と理論学習とについて」(佐々木<愛知学芸大>, 体育科教育, 1962.1)  
 「体育における教室学習の考え方」(北田<明石市教育委員会>, 学校体育, 1963.1)  
 「知識の評価法」(松田<東京教育大>, 体育科教育, 1963.2)

導計画, 指導資料などにわたり, 体育理論の授業づくり  
 に手探りながら取り組まれていたことがわかる。そして,  
 中学校・高等学校にとどまらず, 小学校における体育理  
 論の取り組みも見られる。しかしながら, 執筆者を見ると,  
 大学関係の研究者や大学付属の小中高等学校がほと  
 んどであり, 体育雑誌には一定数の体育理論に関する報  
 告がされているとはいえ, 広く現場で実践されていると  
 は言い難く, 意欲的に取り組んでいる限られたところか  
 らの発信として受け止める必要がある。

その一方で, 当然のことながら, 学習指導要領の改訂  
 に合わせて, 出版社の意図からも, 体育理論に関する解  
 説や論考, 実践が執筆されており, 改訂から改訂まで  
 の間では, 関心事や注目すべき課題対象にはなっていない  
 ことも窺える。

## (2) 民間研究団体の取り組み

体育理論が創設され, 教科書が作成されて以降, 現場  
 での実践が不調であったことは先述のとおりである。  
 「楽しい体育」を標榜し, 体育の学習指導要領を先導し  
 た全国体育学習協議会(以下, 全体研)は, 「『文化的享

受』といった場合の, またこれを『総合的に図る』といっ  
 た場合の, 学びの対象が単なる『種目』や『領域』の学  
 習はなく, 広い意味での『文化としてのスポーツ』にど  
 のように結びつけて学習していけるのか, ということが  
 課題となる。具体的には各種目や運動領域の技術的要素  
 や体力的要素といった行動文化的なレベルだけでなく,  
 それを支えるルールとの関係やそれらを方向づけるスポ  
 ツ観や運動観の学習を, できれば保健領域の健康観の学  
 習とも交差させながら幅広く学んでいけるカリキュラム  
 のデザイン(図5)である」(全国体育学習研究会 2008:

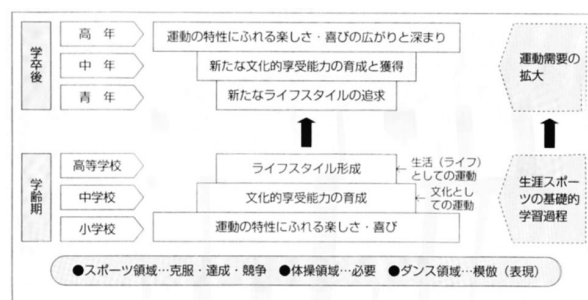


図5 「楽しい体育」におけるカリキュラムの基本構想(全体研 2008: 89)



87) としている。しかし、そのような学びを通して「多様で個性的な好みや楽しさをスポーツ文化との関連で自覚し、さらにそのような学習の積み重ねの上に自らの運動やスポーツに対する価値観に支えらえた生き方、暮らし方（スポーツライフスタイル）への自覚に発展させる」（ibid：88）とは言うものの、そこには、想定はされているのかもしれないが、「体育理論」の位置づけはなく、言及もされていない。さらに、設立50周年を記念して発刊された『楽しい体育』の豊かな可能性を拓く」という記念誌には、小学校から高等学校までの「楽しい体育」の典型授業実践として、運動領域の実践は掲載されているが、「体育理論」の報告は見られない。全体研は、「スポーツ享受能力」を養うことやスポーツ種目を超えたテーマ単元を設定（例えば、「水とかかわる運動・スポーツ」、「地域のスポーツ環境を知ろう」など）するなど「文化としてのスポーツ（の意義）」を学習の中に組み入れようとしながらも、それを実践レベルで提示しきれていないのが現状であろう。

一方、学校体育研究同志会（以下、同志会）は「スポーツの変革主体者」の育成をスローガンにして、体育の授業、健康教育、部活動はじめ、国民スポーツの在り方までを視野に入れて取り組んできた。そして、1992年に愛知県で行われた全国大会において『体育理論』の授業づくり分科会」が新設され、体育理論の授業研究の組織的な取り組みが始められた。それは、体育の教科内容研究に取り組む中で、中村（表3）、そして草深の教科構造試案に基づき、「教室でする体育」をきちんと位置づけようという試みであった。

その設置趣旨については、出原の「教室でする体育 - 体育理論の授業づくり」（小学校編）（中学校編）」（創文

企画、2000年）にまとめられている。そこでは、「今日という時代はスポーツを文化として学ぶ体育を求めている。スポーツの文化的教養の土台をすべての国民に教えるところが学校であり、その役割を担う中心は教科学習である。学校はスポーツ文化の継承・創造の主人公を作るところ、スポーツ文化を変革する力をつけるところであり、体育の授業がその基礎を教えるところである。スポーツを文化として教えることその理論的学習を明確に位置づけること、そして実践化すること - これが教師と学校に求められている課題である」（出原 2000（a）：14）という問題意識が示されている。出原は、スポーツを文化として捉え、文化として教えるためには、技能習熟や技術認識だけではなく、スポーツの文化性を教えるような授業が必要であり、そのためには、「グラウンド」や「体育館」での実践だけでは不十分であり、「教室でする体育」が不可欠である。それにより、スポーツに対して新しい要素や条件や「ものの考え方」を「刻み込む」ことができ、「継承」から「変革」、「創造」の主体者となるとしている。そして、さらに注目すべきは、かつて小学校で体育理論が行われていたことを根拠として、スポーツに関する知識を学ぶ教室で行う体育（座学として授業を組織して指導すること）は小学校から可能<sup>8)</sup>であるとし、小学校から中学校・高等学校までの「教室でする体育授業」（体育理論）に対して大胆な授業時間の配当がされていることである（表4）。また、蓄積された授業の中から授業モデルとして、小学校では「ボールの授業」、「ゴールの授業」や「ルールとは」などスポーツ

表4 新しい体育授業の全体イメージ（出原 2000（a）：16）

表3 中村敏雄の教科構造試案（学校体育研究同志会 1978：136）

歴史領域	技術領域	組織領域
この領域では、人類のそれぞれの時代、社会、階級における運動文化の諸特性と、新しい運動文化創造の正史的必然性について指導する。	この領域では、運動文化の技術の分析・総合を、実験、実習も含めて指導する。	ここでは、運動文化を享受し、また変革、創造してきた組織的な活動の歴史、およびこれからの集団や社会における組織的活動の在り方について指導する。
1. 古代・中世における運動文化の諸特性 2. スポーツの発生、発展における社会的条件 3. スポーツに内包されているイデオロギー 4. 日本における体育やスポーツの発展 5. 国民運動文化創造の目的と意味	1. 運動文化の技術における文化的諸特性 2. 運動文化の技術に内包されている諸矛盾 3. 運動文化の技術の分析・総合の視点と方法 4. 国民運動文化における技術の条件 5. 実習 ①運動文化の技術の歴史的追跡と追体験 ②運動文化の技術の実験的分析研究	1. 古代・中世における組織的活動の実態 2. スポーツクラブの発生と市民運動の展開 3. 国際的なスポーツ組織の発生とその発展 4. 国家のスポーツ政策と国内スポーツ組織の関係 5. 国内スポーツクラブの組織と活動 6. 今後の社会における組織的活動の在り方 7. 実習 ①国内、国外のスポーツ組織の実態調査 ②組織活動における方法原理

授業の場所	基本性格	教科内容	配当時間の比率
グラウンドや体育館で行なう体育授業	A 「できる」（技能習熟）を中心とする時間。	各種スポーツの基礎的技術の獲得をめざす。系統的な技術指導によって、「みんながうまくなること」を実現する。	小学校 60% 中学校 40%
	B 「わかる」（技術認識）を中心とする時間。	スポーツの技術学を教える。技術や戦術・戦術などの原理・法則を学習。授業は「実験、実習」的、探求的授業として展開される。	20% 20%
教室でする体育授業	C 「教材種目」単元のなかの一部の時間。	オリエンテーションやまとめの授業のうち、教室が授業の場所にふさわしいもの。系統的な技術学習と密接な関連があり、それを深めるうえで必要な内容を持つ。「バスケの歴史」「ボールは水泳をどう変えたか」など。	10% 20%
	D 「教材種目」単元に含まれない独立した時間。	直接、技術学習と関わりない内容を教える。主としてスポーツの文化的内容のもの。たとえば小学校では「ボールの授業」「ゴールの授業」「ラインの授業」など。中学、高校では「技術論」「文化論」「主体形成論」など。	10% 20%

の仕組み（構造的認識）に関する内容を、中学校では、「オリンピックの歴史と精神」、「スポーツとお金」や「競争・勝敗・ルール」などスポーツの見方や在り方の学習の実践例が豊かに示されている。

同志会内では、この出原の示す体育理論の授業構想をもとに、『体育理論』の授業づくり分科会が学習指導要領に位置づけられながら現場での実践が不調であった体育理論領域において、独自に集团的検討を積み重ね、手探りながらも実践を蓄積している。その取り組みは、数少ない組織的、継続的、そして地道な取り組みであり、そこには、同志会結成当時から会をリードし、体育理論の重要性を主張しつづけてきた中村が提起する「体育は何を教える教科か」<sup>9)</sup>という命題に迫ろうとし、また体育の授業構造を根本的に変えることまでが意図されているのである。

#### 4. 「文化としてのスポーツ」を位置づけた体育理論の授業づくりに向けて

ここでは、「文化としてのスポーツ」の授業を構想する上で、改めて「スポーツ」と「文化」の関係を整理し、その具体的内容をどのように想定し、また実践化するために検討すべき課題についてまとめた。

##### (1) 「文化としてのスポーツ」を学ぶということとは

そもそも「スポーツを文化としてみる」ということは、寒川の説明を借りれば、「音楽や美術など常識的な意味での文化ではなく、『食文化』などと使われる文化、具体的な料理の作り方、つまり、レシピだけでなく、食べ方についての作法、食べ合わせや食養生やダイエットなど医学的と神話的な食べ方との関わり方の情報、料理を盛る器の美的政策やエコに配慮した食器素材の開発、これらを伝えるメディアなど、際限なく広がる複合体として食文化が理解されている」（寒川 2009：33）という文化認識に立つことであり、それをスポーツ文化に当てはめると、「スポーツを行うための学び」に留まらず、「スポーツを知るための学び」、「スポーツに自立するための学び」、そして「スポーツと共生する学び」という次元での学びが必要であるとする友添の教科内容の試案（友添 2001：47）につながっている。

そのようなスポーツ文化の学習論に立つならば、体育理論の授業において「文化としてのスポーツ」を学ぶということは、スポーツの社会的な意味や文化的意義を理

解するということになる。つまり、スポーツが社会にどのように貢献しているのか、することができるのか、またスポーツが国民の生活をどのように豊かにするのかを探り、スポーツを歴史的産物として捉え、先人から受け継いだスポーツの文化的価値を後代にどのように伝えるのか、さらにその価値を維持・発展させるためにスポーツをどのように変革し、新たに創造するのかということを検討するまでの作業を含んでいる。

今回の学習指導要領において、中学校3年生の「文化としてのスポーツの意義」のところでは、「現代生活におけるスポーツの文化的意義」、「国際的なスポーツ大会などが果たす文化的な意義や役割」、「人々を結び付けるスポーツの文化的な働き」の3つの視点から、高等学校1年の「スポーツの歴史、文化的特性や現代スポーツの特徴」は、「スポーツの歴史的発展と変容」、「スポーツの技術、戦術、ルールの変化」、「オリンピックムーブメントとドーピング」、「スポーツの経済的効果とスポーツ産業」という内容から組立てられ、指導することになっている（文科省 2008, 2009）。ただ単に知識の切り売りではなく、スポーツの主体者を形成しようという視点から内容を精選し、それらを系統性をもたせて学年毎に配列したとされている。しかしながら、それらのテーマが何故設定されたのか、スポーツの文化的意義や価値を学ぶためにどのように知識の構造化を図り、その内容構成が行われたかについてその詳細が示されていない。厳しく言えば、学べきテーマの羅列でしかないということもできる。そのような批判を加えた上で、明らかにそれまでの体育理論の在り方とは大きく転換が図られ、前進したのは確かであり、改訂作業にかかわった佐藤らが示す図6の「『文化としてのスポーツの意義』の単元構造図」は、「文化としてスポーツ」を学ぶ授業を構想し、実践に移していく作業には参考になる。

##### (2) 「文化としてのスポーツ」を学ぶ授業のこれまで

今回の学習指導要領の改訂前からも、体育理論の実践は断続的ながらも報告されてきており、その問題意識の高い小学校教師の中では、体育の授業時間を割いて行うことが難しくても「総合的な学習」を利用して、例えば「オリンピックの授業」を位置づけ、子どもたちが調べ、検討し、発表・ディスカッションするという取り組みが散見できる（井上, 2012）。しかし、それに比べて中学校、高等学校の体育教師による体育理論の実践の蓄積は

## ③中学校3年&lt;文化としてのスポーツの意義&gt;

## ア. 単元構造図

中学校 3年次 H 体育理論					
① 単元名	② 指導内容の概要	③ 学習指導要領の位置	④ 学習指導要領解説の記載内容	⑤ 具体的指導項目	⑥ 発問や学習活動のイメージ
(3) ア	ア スポーツは文化的な生活を営み、よりよく生きていくために重要であること。		現代社会におけるスポーツは、生きがいのある豊かな人生を送るための重要な要素となっており、豊かな文化や伸びやかな自己開発の機会を提供する重要な文化的意義を持っていることを理解できるようにする。	○現代社会におけるスポーツの文化的意義 ○スポーツの重要性やスポーツ振興計画	発問：中学生がスポーツの重要性について、どのような考えを持っているか。 活動：グループワークで、各自がスポーツの重要性について、自分の考えを表現し、他のメンバーと共有する。
(3) イ	イ オリンピックや国際的なスポーツ大会などは、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしていること。		オリンピック競技大会や国際的なスポーツ大会などは、世界の国々や地域の人々を結びつけ、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしていることを理解できるようにする。	○スポーツの国際大会 ○スポーツの国際大会が果たす役割	発問：オリンピック競技大会や国際的なスポーツ大会が、世界にどのような影響を与えているか。 活動：グループワークで、各自がオリンピック競技大会や国際的なスポーツ大会が世界に与えている影響について、自分の考えを表現し、他のメンバーと共有する。
(3) ウ	ウ スポーツは、民族や国、人種や性、障害の道いなどを超えて、人々を結びつけていること。		スポーツは、民族や国、人種や性、障害の道いなどを超えて、人々を結びつけていることを理解できるようにする。	○スポーツの文化的価値 ○スポーツの文化的価値がもたらす役割	発問：スポーツは、民族や国、人種や性、障害の道いなどを超えて、人々を結びつけていることを理解できるようにする。 活動：グループワークで、各自がスポーツが民族や国、人種や性、障害の道いなどを超えて、人々を結びつけていることを理解できるようにする。

図6 中学校3年「文化としてのスポーツの意義」領域の単元構造図 (佐藤・友添 2011: 200-201)

④ 単元の構成 (授業計画の想定)				⑤ 評価目標・評価機会		
単元	時間	関心・意欲・態度	思考・判断	知識・理解	関心・意欲・態度	思考・判断
1	0	「体育」や「スポーツ」の意義について、自分自身の考えを表現し、他のメンバーと共有する。	「体育」や「スポーツ」の意義について、自分自身の考えを表現し、他のメンバーと共有する。	「体育」や「スポーツ」の意義について、自分自身の考えを表現し、他のメンバーと共有する。		
2	10	「体育」や「スポーツ」の意義について、自分自身の考えを表現し、他のメンバーと共有する。	「体育」や「スポーツ」の意義について、自分自身の考えを表現し、他のメンバーと共有する。	「体育」や「スポーツ」の意義について、自分自身の考えを表現し、他のメンバーと共有する。		
3	20	「体育」や「スポーツ」の意義について、自分自身の考えを表現し、他のメンバーと共有する。	「体育」や「スポーツ」の意義について、自分自身の考えを表現し、他のメンバーと共有する。	「体育」や「スポーツ」の意義について、自分自身の考えを表現し、他のメンバーと共有する。		
4	30	「体育」や「スポーツ」の意義について、自分自身の考えを表現し、他のメンバーと共有する。	「体育」や「スポーツ」の意義について、自分自身の考えを表現し、他のメンバーと共有する。	「体育」や「スポーツ」の意義について、自分自身の考えを表現し、他のメンバーと共有する。		
5	40	「体育」や「スポーツ」の意義について、自分自身の考えを表現し、他のメンバーと共有する。	「体育」や「スポーツ」の意義について、自分自身の考えを表現し、他のメンバーと共有する。	「体育」や「スポーツ」の意義について、自分自身の考えを表現し、他のメンバーと共有する。		
6	50	「体育」や「スポーツ」の意義について、自分自身の考えを表現し、他のメンバーと共有する。	「体育」や「スポーツ」の意義について、自分自身の考えを表現し、他のメンバーと共有する。	「体育」や「スポーツ」の意義について、自分自身の考えを表現し、他のメンバーと共有する。		

乏しく、特に、スポーツの歴史的・文化的内容を扱った実践報告は、先述の同志会の「『体育理論』の授業づくり分科会」が唯一継続的な体育理論の授業研究に取り組んでいるというのが実情であった。運動・スポーツを「運動文化」として捉え、スポーツの継承・発展・創造の主体者形成をめざす同志会の中であって体育理論の取り組みは、まさしく「文化としてのスポーツ」を学ぶ授業の在り方を問うものであることから、そこではどのような実践が展開されてきたのかを検討することは、ここからの体育理論の授業づくり研究には欠かせない。

出原は、スポーツを文化として教えるためのイメージについて、体育の学力を「スポーツの技能習熟」「スポーツの技術認識(戦略・戦術認識も含む)」「スポーツの文化認識」の3つの視点から捉えた上で、次の4点を挙げている(出原 2000 (a): 14)。それらは、これまでの「できるようにする」「うまくする」だけの体育から脱却すること スポーツの技術学(技術や戦略・戦術の科学)を教える授業であること スポーツが他の文化と区別される固有の特徴である「競争」「勝敗」の意味や原理を教える授業であること スポーツと人間関係を歴史や哲学、政治・経済とのかかわりを土台にして、

スポーツの価値や文化としての発展論を教える授業であること、である。

そして、それに基づいて「技術・戦略・戦術の科学」(技術学)、「技術・戦略・戦術の発展史」(技術論)、「ボールやゴールやラインの意味」、「施設、用具と技術、記録の関連」、「『決着のつけ方』(競争・勝敗)の文化的特徴」、「英・米・日のスポーツ文化比較」、「スポーツの日本的受容」、「スポーツの価値」などの「教えたい内容」(テーマ)が挙げられている(ibid: 15)。ただ、これらは体育理論を単元構造化し、体系立てられた中での十分な内容やテーマとは言い難く、自身が述べるように、ラフスケッチであるが、同志会内で先行的・試行的に取り組まれていた実践を整理しながら、その後の体育理論の実践づくりや授業研究に向けて方向性を示した意義深いものである。

体育の外に目を向けると、体育教師ではなく、社会科の教師たちが歴史教育の授業研究として、あるいは文化史への多様なアプローチとして「スポーツの世界史 - ハロルドは'It's not fair.'と言った」(笹川 2000)や「世界史への扉 - サッカーの歴史」(宮地 2002)といった実践報告を見ることができ、それらは、歴史教育の教材



として扱うスポーツと体育理論において扱うスポーツを峻別する必要性を示し、体育理論の授業づくりを行う上で大切な視点を提供してくれていると受け止めなければならない。

### (3) 今後の実践の課題や問題点

出原は、従来の「体育理論」の実践には、「『ルール解説』のみの授業」、「自然科学的な内容のみの授業」、「調査などの活動をさせるだけの授業」、「『社会科』的『告発』的授業」が多く、スポーツ情報の嵐の中、つまりマスコミに加工された、刺激的で、刹那的な、勝利至上主義のスポーツ情報に囲まれて生活し、生きている子どもたちはスポーツを文化として総合的に学ぶことを求めているという認識に教師は立つ必要がある。そのために、まず教師自身がスポーツ歴史認識や社会認識を土台とするスポーツの文化的認識を持ち、それを「教室」という場で理論として学ばせる体育理論の授業づくりを展開していかなければならないとする(出原 2000 (a) : 17-18)。

では、具体的な授業づくりにおいて、どのような課題があるのであろうか。先述の同志会の「『体育理論』の授業づくり分科会」の責任者として、また高等学校の教師として、体育理論のみならず、いろいろな運動領域の体育実践の提示してきた成瀬は、体育理論の授業づくりの課題として、「スポーツ観」を揺さぶり・変革を促す視点 個別教材を越えたスポーツ全体に関する横断的な内容へのアプローチ 歴史的事実への着目・内容化 生活の中での身近な対象への着目 子どもの興味関心を引き出すための教授行為、の5つを挙げている(ibid : 116-118)。

その中で注目したいのは、まず「スポーツ全体に関する横断的なアプローチ」である。成瀬はその内容として「日本のスポーツ観」や「スポーツにおけるジェンダー」、「スポーツ参加の動機」などを例示しているが、さらに、「スポーツ全体」という視点で外せない内容として「スポーツの主人公(担い手)とは」、「スポーツの『する』『みる』『支える』ことの意味と理解」、そしてスポーツ文化を理解する上でその学びの中核となる「スポーツにおけるルールの意味」を挙げることができる。つまり、スポーツの文化的価値を学び、追求するには、スポーツは誰のために、何のために行うのかという問いへのアプローチが不可欠だからである。次に、「生活の中での身近な対象への着目」についてである。子どもたちのスポー

ツ生活の中で、日頃「何故?」と思うことや「言われてみると・・・」というスポーツに対する素朴な疑問を教材化すること(例えば「オフサイドはなぜ反則か?」や「審判はどうして誕生したか?」、「ユニフォームや背番号はなぜあるのか?」など)により、成瀬の言葉を借りれば、「それにより、子どもたちの能動的な学習を可能に」し、「『わたる』べき『科学』の世界(教科内容)の内実」(ibid : 117)に迫ることができる。それは、「歴史的事実への着目」とも関係し、人々によってどのように継承され、変革され、現在に至っているのかという学びとは不可分である。これらのことは、筆者が「民俗フットボール」に教材としての可能性を見出す理由でもある。

以上のような教える内容(教科内容)や教材の議論に加え、教授方法に言及すると、教室で行う授業として「保健」の授業が展開され、多くの体育教師はその経験を持っている。しかしながら、その授業づくりの内容や方法はそのまま「体育理論」の授業づくりには当てはまらない。両者の共通項は生かしつつも、「体育理論」固有の授業づくりが展開されなければならず、今回の新たな体育理論への期待に応えるためには、試行的な取り組みを含めて実践の蓄積が求められているのである。

### おわりに

今回の学習指導要領の改訂に識者としてかかわった故高橋は雑誌「体育科教育」の座談会で「日本体育学会で体育・スポーツ科学領域の研究の成果が積み重ねられ、その成果が蓄積されてきていますので、その知識は教室で学ばれるべきなのです。」と述べ、そうすることにより、「今こそ新しい体育のイメージを広く国民に定着させていく必要」があるとする(大修館書店編集部 2008 : 19)。つまり、教室で行う体育理論の授業が体育という教科観を変えろという指摘である。今回こそ、不毛と言われた「体育理論」の授業が注目され、高橋が言う体育の授業観が変革する機会にしなければならない。

しかし、改訂後、学校現場でどのように受け止め、議論がなされているのか、どれだけ具体的に実践に取り組まれているのか確認はできていない。一部の教師からは、以前とさほど変化していないという話も聞く。しかしながら、この先、何らかの確認作業が行われるはずであるし、すでに次の学習指導要領の改訂作業が始まり、今回の改訂内容を推し進める方針が示されていることから、学校現場において、そしてその教員養成課程においても

体育理論の授業づくり研究は不可欠である。

本稿の目的は、次稿で提案する試案づくりの前提の作業としてこれまでの体育理論の取り組み、その中での「文化としてのスポーツ」を学ぶ授業のこれまでの成果を確認し、その課題を探り、授業構想につなげることであった。そのために、その授業を制度として位置づけるために学習指導要領の改訂にかかわった人物の主張や研究者の見解をもとに、またこれまで細々としかし息長く実践の蓄積を重ねてきた同志会はじめ研究団体、さらには個人の取り組みに学び、整理した。

次稿では、先述のように、文化研究の取り組みとして長年取り組んできた「民俗フットボール」の教材的価値を検討し、それを教材として、ひとまず学習指導要領に準拠して「文化としてのスポーツの意義」(中学3年)、「スポーツの歴史的発展と変容」(高校1年)の内容についての授業試案を提示したい。

#### 注

- 1) 筆者は、インターネットを頼りに国内の国公立大学の体育・スポーツ系学部、教育系学部において、WEB上で公開している「体育科教育法(指導法)」のシラバスを閲覧した(2015年8月末時点)。また、直接入手したシラバスを含め、確認できた15大学では、どの大学においても「体育理論」の授業づくりに関する内容は組み込まれていなかった。
- 2) 筆者は、1993年に英国に残存する民俗フットボール研究に着手し、確認した17か所すべての調査を2015年3月に終了した。その中間報告として、「フットボールの原点 - サッカー、ラグビーのおもしろさの根源を探る -」(創文企画2014)を出版した。
- 3) 丹下は、その解説はしていないが、昭和28年当時の高等学校男子の体育の「年間計画例」(前川他1961:130-131)を示しており、その中に「体育理論」の領域が含まれている。それによると、「体育理論」は各学年の3学期末に「既習教材(選)」と交互に2~3時間行うように計画されている。それは、学年末の時間潰しなのか、それとも運動教材を学んだあとのまとめという意味があったのかは不明である。
- 4) 1958年の中学校学習指導要領改訂以降、1970年の高等学校の改訂までの内容の「精選」について、小松らは、次のようにまとめている。「この時期は、教科体育の目標に『鍛錬主義』『体力主義』『技能主義』が打ち出されている。そうしたなかで、『体育理論』を『できるだけ運動学習と関連づけて指導すること』という指導上の論理が、内容面にまで貫かれてきていることがわかる。それに合わせて『体育理論』領域の内容も自然科学的・技術学的認識内容が整理・統合され、社会科学的認識内容が後退されていったものと考えられる。つまり、『鍛錬』『体力向上』『競技

力向上』そして『運動学習』などに直接結びつかない社会科学的認識内容は、『精選』の名の下に削除されていったのである」(小松他1993:188)。

- 5) 友添の「体育教科書の変遷に関する研究」(友添1999)に、「体育教科書」の誕生以降、それがどのように扱われ、どのような内容構成で作成されてきたか、また「体育理論」の授業でどのように扱われていたかなどについて詳細に解説されており、当時の「体育理論」の授業の状況を理解する上で参考になる。
- 6) 井谷が整理した「学習指導要領における体育理論の内容の推移」(井谷1997:337)に、筆者がその後の改訂で示された内容を加筆した。
- 7) 学校体育研究同志会愛知支部の「体育理論プロジェクト」はその活動として、「学校体育」誌における体育理論実践の系譜をまとめ、同会の「『体育理論』の授業づくり分科会」の設立以降その責任者を務める成瀬は、それに「体育科教育」誌の系譜を加えて1993年8月3日の同会全国大会(女川大会)において報告している。  
図4はそこで報告された資料をもとに筆者が作図し直したものである。
- 8) 中瀬古は、学校体育同志会の実践の分析をもとに、小学校における体育理論に関する実践の可能性と課題について検討している(中瀬古1998)。
- 9) 中村敏雄は「体育学研究」に「体育は何を教える教科か」(中村2003)というテーマで「総説」を執筆し、近代スポーツをどのように捉え、またスポーツを通して何を教えるべきかについて論じている。

#### 引用文献・参考文献

- 学校体育研究同志会編、体育理論の指導(学校体育叢書)、ベースボールマガジン社、1978
- 井上雅規、「小学校の教育課程にオリンピックの学習を位置づける」、体育科教育、60-7:22-26,2012
- 井谷恵子、「体育理論の授業」、戦後学校体育実践論第2巻 - 独自性の追求(中村敏雄編)、創文企画、331-349,1997
- 出原泰明、「『教室でやる体育の授業』のひとつの試み - 『ボールの授業』の実践モデルの意義 -」、和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要、5:147-164,1995
- 出原泰明編、教室でする体育 - 「体育理論」の授業づくり - (小学校編)、創文企画、2000(a)
- 出原泰明編、教室でする体育 - 「体育理論」の授業づくり - (中学校編)、創文企画、2000(b)
- 井筒次郎・鈴木 漠、「高等学校における『体育理論』の指導に関する一考察」、日本体育大学紀要、27-2:293-300,1998
- 菊 幸一、「生徒の知的要求に応えるスポーツ文化のカリキュラムとは」、体育科教育、49-6:48-51,2001
- 菊 幸一、「することだけがスポーツではない」、体育科教育、57-10:16-19,2009
- 菊 幸一、「『体育理論』重視の背景と学習指導のポイント」、保健体育ジャーナル、90:1-5,2010
- 小松武寿・海野勇三・功刀俊雄、「中・高校の教科体育における『体育理論』領域の内容編成に関する研究 - 戦後学習指導要領の『体育理論』領域の変遷を中心として -」、山口大

- 学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, 5 : 171-198, 1993
- 草深直臣, 「体育における知的認識」, 体育科教育, 28-13 : 16-18, 1980
- 前川峯雄・松浦義行, 「体育理論の最低基準(1)」, 体育の科学, 4-9 : 361-365, 1954 (a)
- 前川峯雄・松浦義行, 「体育理論学習の最低基準」, 体育の科学, 4-11 : 463-467, 1954 (b)
- 前川峯雄・江橋慎四郎・阿部 忍・丹下保夫, 体育科教育法(保健・体育入門シリーズ), 体育の科学社, 1961
- 前川峯雄・江橋慎四郎編, 体育科教育法, 杏林書院, 1977
- 松田岩男・宇土正彦, 体育科教育法(現代保健体育学大系), 大修館書店, 1978
- 松浦義行, 「体育理論」, 体育科教育, 18-8 : 30-32, 1970
- 宮地賢治, 「世界史の扉 - サッカーの歴史」, 広島県立教育センター, 2002 [www.hiroshima-c.ed.jp/web/an/h/sya/sya-h-003.pdf](http://www.hiroshima-c.ed.jp/web/an/h/sya/sya-h-003.pdf) (最終閲覧: 2015.8.30)
- 文部科学省, 中学校学習指導要領解説 保健体育編, 文部科学省, 2008
- 文部科学省, 高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編, 文部科学省, 2009
- 永田靖章, 「学習指導要領の中の『体育理論』」, 体育科教育, 36-7 : 18-20, 1988
- 中村敏雄, 「体育は何を教える教科か」, 体育学研究, 48 : 655-665, 2003
- 中瀬古 哲, 「小学校における『体育理論』の可能性と課題」, 教育学研究紀要(中国四国教育学会), 44-2 : 334-339, 1998
- 岡出美則, 「日本における認識目標と授業過程に関する議論について」, 愛知教育大学体育教室研究紀要, 15 : 1-18, 1990
- 岡出美則, 「新学習指導要領にみる文科省のいとねらい」, 体育科教育, 56-6 : 20-23, 2008
- 岡出美則, 「体育の『知』をどこで, どう教えればいいのか」, 体育科教育, 57-10 : 20-23, 2009
- 岡出美則, 「健やかな体の育成と保健体育科の役割」, 中等教育資料, 908, 2012
- 佐伯聰夫, 「生涯スポーツと『体育理論』」, 体育科教育, 36-7 : 14-17, 1988
- 笹川裕史, 「スポーツの世界史 - ハロルドは"It's not fair."と言った」, 大阪教育大学附属天王寺中・高研究収録, 42, 2000
- 佐藤 豊, 「体育理論の評価規準づくり」, 体育科教育, 53-7 : 55-59, 2005
- 佐藤 豊, 「新学習指導要領は体育の『知』で何を期待しているのか」, 体育科教育, 57-10 : 24-28, 2009
- 佐藤 豊・友添秀則編, たのしい体育理論の授業をつくろう, 大修館書店, 2011
- 佐藤 豊・友添秀則・今関豊一, 日野克博, 「体育科教育のこれから - 学習指導要領は何を求めているのか - 」, 鹿屋体育大学学術研究紀要, 45 : 39-71, 2012
- 寒川恒夫, 「『スポーツ文化』とは」, 体育科教育, 49-6 : 40-43, 2001.4
- 寒川恒夫, 「『体育理論』では何をこそ教え学ばせるべきか」, 体育科教育, 57-10 : 30-33, 2009
- 大修館書店編集部, 座談会「新学習指導要領戸体育 - 何が, 同, 何故変わり, どうなるのか」, 体育科教育, 56-6, 10-19, 2008
- 高橋健夫, 「体育授業で問題になる知識とは何か」, 体育科教育, 55-2 : 10-13, 2007
- 友添秀則, 「『体育理論』をめぐる諸問題」, 「発信型」学校体育の創造 - 問われる学校体育のアカウンタビリティ -, 体育科教育創刊45周年記念増刊号, 41-45, 1998
- 友添秀則, 「体育教科書の変遷に関する研究」, スポーツ教育学研究, 19-1 : 55-86, 1999
- 友添秀則, 「体育に理屈はいらない - なぜ今, スポーツ文化を学ぶのか - 」, 体育科教育, 49-6 : 44-47, 2001
- 友添秀則, 「いま, なぜ体育に『知』の学習が必要なのか」, 体育科教育, 57-10 : 10-14, 2009
- 梅本二郎, 「体育になぜ理論学習が必要か」, 体育科教育, 36-7 : 10-13, 1988
- 全国体育学習研究会編, 「楽しい体育」の豊かな可能性を拓く - 実践への手引き -, 明和出版, 2008